25　［高血圧が脳卒中の最大危険因子］の認識

西村　謙一
西九州大学

高血圧症は，わが国の成人において，もっとも頻度の高い疾患で，その結果生じる脳卒中は，医学的にも，また，社会的にも，大きな問題である．高血圧が，脳卒中の最大危険因子であることは，1990 年以来，学会の啓蒙により，広く知られるようになった．わが国のみならず，高血圧が，脳卒中の最大危険因子であることは，疫学的にも，明らかにされ，現在では，世界的な常識である．この事実が，いつ頃から，認識されるようになったかは，興味ある問題である．演者は，幕末からの内科書，および症例報告を渉猟して，この点を明らかにした．1857 年（安政 4 年）発行の緒方洪庵のフッヘランドの内科書の訳本では，脳卒中の出血と梗塞との区別はない．しかし，アポプレキシーの語は出てくる．脳卒中の原因についての記述はない．1908 年（明治 41 年）橋本節斎の近世内科全書には，脳出血の原因は，粟粒動脈瘤と説明している．高血圧が原因との記載はない．

血圧については，1887 年（明治 20 年），医術開業試験問題の生理学，第 2 問，［呼吸の血圧に及ぼす作用，及び理由］として問題を出されている．1905 年（明治 38 年），コルトコフが，水銀血圧計を用いる聴診法による血圧測定法を発表しているが，わが国で臨床に血圧測定が用いられたのは，かなり後である．明治，大正時代には，各科の症例報告に於いても，脈拍については，記載されているが，血圧の記載は見られない．昭和の初めになっても，この傾向はかわらず，血圧の記載は見当らない．

1930 年（昭和 5 年）の東京医事新誌に，18 例の高血圧患者に，降圧薬を用いた治検例の報告が見られ得る．また，1932 年（昭和 7 年）には，「高血圧患者基新陳代謝亢進の本態について」の論文が同誌に掲載されている．

1935 年（昭和 10 年）の東京医事新誌には，［人の血圧を上昇せしめるアルコールの量について］，及び［若き健康なる男子の血圧に対するコーヒーの習慣的使用の影響について］が外国論文の抄録として掲載されている．．この頃から，高血圧に注目され始めたようである．しかし，まだ，高血圧が，脳卒中の原因とは認識されていなかった．

1934 年（昭和 9 年），三浦謹之助は，「脳溢血の成因に関する最近の論説」と題して，総説を書いている．同著者は，諸外国の研究者の説を紹介しているが，その中で，諸家の説は，粟粒動脈瘤が脳溢血の主因とするのに妨げになるものはないと，粟粒動脈瘤説に賛同している．ただ，“アテローム変化した血管は，高血圧に耐えないで溢血する”とのリュールの説も紹介しているが，著者の意見は述べてはいない．この論文は，当時の最先端の総説と考えてよい．1942 年（昭和 17 年）発行，第 10 版の呉　建，坂本恒雄著，内科学，上巻には，本態性高血圧 Essentielle Hypertonie の語が出てくる．さらに，高血圧が，脳出血の原因であるとのアショッフなどの説を紹介している．第二次世界大戦後の医学の，どの教科書にも，脳卒中の原因は，高血圧であると明記されている．以上で，わが国で，高血圧が，脳卒中の最大危険因子と認識されるようになったのは，1935 年（昭和 10 年）以後のことである．

現在では，世界的に大規模の調査が，いくつも実施され，脳卒中を予防するには，降圧薬を服用して，血圧を正常に保つ必要があることが実際に証明されている．かっては，脳卒中は，わが国の死因の 1 位であったが，1980 年以後は，悪性腫瘍，心臓疾患についで，第 3 位となった．これは，高血圧が，脳卒中の最第危険因子であるとの認識が大きく貢献していると考えられる．